

#### ④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第35回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会（無05）	無形文化遺産部	65
平成23年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（企10）	企画情報部	66
伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（*修03）	保存修復科学センター	67
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修04）	保存修復科学センター	67
総合研究会（企）	企画情報部	68
企画情報部研究会（企）	企画情報部	68
保存修復科学センター研究会（保）	保存修復科学センター	69

- \*注
- ・伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①修03）の一環として実施した。
  - ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①修04）の一環として実施した。



## 第35回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「染織技術の伝統と継承—研究と保存修復の現状—」(④無05-11-1/1)

平成23年度は「染織技術の伝統と継承—研究と保存修復の現状—」をテーマとし、無形文化遺産部の担当で文化財の保存と修復に関する国際研究集会を開催した。研究会では国内外から染織品制作の技術者、染織品修復技術者、学芸員、研究者など様々な立場の各専門家を招き、染織品を「つくる」「まもる」「つたえる」といった技術面よりアプローチすることで、今後の「染織技術」研究の道筋を示すことを目的とした。

日 程：2011（平成23）年9月3日（土）～5日（月）

会 場：東京国立博物館平成館大講堂

参加者数：404名（3日間の延べ人数）

### [基調講演]

長崎巖（共立女子大学）「染織技法の伝承—技法の変化・置き換え・相互関係—」

河上繁樹（関西学院大学）「染織史における復元的研究—江戸時代の小袖に見る染色技法を中心に—」

### [セッションⅠ] 染織技術をまもる

菊池理予（東京文化財研究所）「日本における染織技術保護の現状と課題—わざを守り伝えるために—」

韓尚洙（韓国・人間文化財）「日本の国宝天寿国繡帳」

北村武資（重要無形文化財保持者）「織物技術について、現場からの報告」

福田喜重（重要無形文化財保持者）「繊維の王、絹と共に60年—刺繍の今昔と現在の伝承と提案—」

### [セッションⅡ] 染織品保存修復のいま

梶谷宣子（メトロポリタン美術館）

「メトロポリタン美術館の染織品収蔵管理に携わって—1966年3月～2003年8月—」

ベティーナ・ニーカンブ（アベッグ財団）

「アベッグ財団における染織品の保存ワークショップ—スイスにおける染織品保存の歴史と現状—」

小林彩子（文化庁）「染織品保存修理の理念」

田中陽子（宮内庁正倉院事務所）「正倉院宝物にみる染織品の保存修復の歴史」

城山好美（株式会社松鶴堂）「染織文化財を伝える—修理の現場から—」

矢野俊昭（染技連）「『紋縮緬地熨斗文友禅振袖』修理の報告—染屋が修理を始めたら—」

岡田宣世（女子美術大学）「日本刺繍と染織品の修復」

### [セッションⅢ] 染織技術へのまなざし

シャロン・タケダ（ロサンゼルス郡立美術館）

「異文化を結ぶ技法・絞り染めの米国とその他の地域への広がり」

アンナ・ジャクソン（ヴィクトリア&アルバート美術館）

「外国へのあこがれ：ヨーロッパと日本における“エキゾチック”な染織品の受容とその影響」

小山弓弦葉（東京国立博物館）「室町時代の舞楽装束に見る染織技術」

土屋貴裕（東京国立博物館）

「絵画史研究は染織技術を明らかにすることができるか—中世職人歌合絵を起点として—」

### [セッションⅣ] 染織技術をつたえる

佐々木正直（文化庁）「無形文化財工芸技術分野における後継者育成について」

石井美恵（女子美術大学美術館）「イギリスにおける染織品保存修復士の教育」

深津裕子（女子美術大学美術館）「大学教育における染織技術の継承と保存への取り組み」

### [総合討議]

## 平成23年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-11-1/5）

### 第45回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年度で45回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今年より「モノ／イメージとの対話」とのテーマを掲げることとした。個々の講演内容は以下の通りであるが、今回は、各日の講演にあたり下記のようなテーマを設け、これに関連した視点、あるいは問題の提起を試みた。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ236人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、188人から回答を得た（回収率：79.7%）。結果は、「たいへん満足した」104人、「おおむね満足した」64人、「普通だった」12人、「不満が残った」0人、回答者の89.4%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2011（平成23）年11月11日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

「日本美術史における様式の複線性―様式の選択と編集―」

・皿井舞（東京文化財研究所）「平安時代前期から後期へ―六波羅蜜寺十一面観音像にみる様式―」

京都・六波羅蜜寺十一面観音像は、十世紀半ば、平安時代前期から後期へと移り変わる過渡期につくられた像である。本像の造像にあたって、いかに過去の作品を参照しつつ、次代につながるかたちを獲得したか、制作背景を再検討しつつ考察した。

・高岸輝（東京工業大学大学院）「鎌倉時代から室町時代へ―中世やまと絵様式の源流と再生―」

室町時代のやまと絵、特に絵巻を通覧すると、流派や絵師の枠を超えた複数の様式が並存していることに気づく。それらは、平安末期から鎌倉期のやまと絵を範として仰ぎつつも、リバイバルの方向性は作例によって異なる。再生の傾向にあらわれる差異に注目し、比較することによって、作品の同時代における位置づけや制作の背景を読み解く。

第2日：2011（平成23）年11月12日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

「古美術のコンセプト」

・綿田稔（東京文化財研究所）「室町漢画の基盤―周文と雪舟の場合―」

雪舟筆「秋冬山水図」（東京国立博物館蔵）のうち冬景図は、「斬新」と評しうる画面構成で知られている。ここでは冬景図の「謎」について、雪舟と雪舟の時代の常識的コンセプトに照らした解釈を試みる。また同様のコンセプトを雪舟の師である周文にも適用し、今まで定まらなかった周文の基準作について、その候補を挙げてみた。

・佐々木守俊（町田市立国際版画美術館）「平安～鎌倉時代の印仏―スタンプのほとけ―」

スタンプ式の簡易な仏画である印仏は、その素朴な味わいが愛され、売買の対象ともされてきた。しかし、本来はしばしば仏像の内部空間に納入されて重要な役割を演じ、大規模な法会の場においても使用される、特徴ある尊像だった。そうした制作環境を再現し、「版画」としての評価とは異なった視点から、印仏の歴史的意義を考察した。

## 伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会 (①修03-11-1/5の一部として実施)

平成23年度は、各種伝統的な修復材料のうち建築文化財における伝統的な塗料の調査と修理を主なテーマとして取り上げた研究会を開催した。この研究会は、一昨年に開催した第3回研究会の「建築文化財における漆塗料の調査と修理」の続編ともいえる内容である。漆塗料は日本を代表する優れた伝統的な塗料であると同時に修復材料であるが、修復の現場では建築文化財の塗料には漆塗料、あるいは顔料+膠材料の二つしかないかのようなイメージがあった。ところが、実際にはそれ以外の乾性油や松脂、柿渋など様々な材料を時と状況に応じて塗料として使用してきたことが明らかになってきた。今年度の研究会では、このような漆塗料でもない膠材料でもない、いわば第三の塗料について取り上げた。研究会では、まず北野が問題提起を行い、建築装飾技術史研究所の窪寺茂氏から主に「チャン」と呼ばれる塗料とその塗装技法についてお話をいただいた。次に、日光社寺文化財保存会の佐藤則武氏から、日光社寺建造物の漆塗料以外の塗料の状況について技術者という立場から御講演いただいた。最後に明治大学の本多貴之氏から、乾性油を中心とした塗料の科学についての解説と、実際に日光社寺建造物の塗料の有機分析を行った結果の報告をいただいた。講師の方々のお話は、それぞれ専門の立場からの話題提供であっただけに説得力もあり、さらに会場では佐藤氏にお持ちいただいた日光社寺建造物の塗料資料や手板などを見学することもできた。

第5回「建築文化財における伝統的な塗料の調査と修理」

日 時：2011（平成23）年9月29日（木）13：20～17：30

会 場：東京文化財研究所セミナー室（地下1階）

講演者：北野信彦（東京文化財研究所）「建築文化財における塗料の使用に関する問題提起」

窪寺 茂（建築装飾技術史研究所）

「伝統的な塗料の再認識 —17, 18世紀台頭のチャン塗技法研究—」

佐藤則武（日光社寺文化財保存会）「日光社寺建造物群における各種塗料の使用の歴史」

本多貴之（明治大学理工学部・保存修復科学センター客員研究員）

「建築文化財における塗料の分析（日光東照宮の寛永期塗料等の調査報告）」

## 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①修04-11-1/5の一部として実施)

平成23年度は、近代化遺産の中でも建築に使用されている油性塗料を主なテーマとして研究会を開催した。日本では重要文化財に指定された建築物等の塗装に油性塗料が多く使われている。現在それらの建物の修復を実施するに当たり、油性塗料の入手が困難な状況になっている。これは、油性塗料の特性である乾き難さが現在の工程に合わない事が大きな原因となり、通常の工事では使われなくなっているため、塗料メーカーが製造しなくなったからである。今回は、文化庁で建造物の修復の指導をしている担当者、実際に博物館において建物の塗装を計画し、実施している担当者、塗装工事に携わってきた塗装業従事者、また、ドイツ技術博物館の化学関係の修復部門責任者を招いて研究会を行った。

第25回「近代建築に使用されている油性塗料に関して」

日 時：2012（平成24）年2月10日（金）10：00～17：20

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講演者：中山俊介（東京文化財研究所）「近代文化遺産の修復に使われる油性塗料について」

小沼景子（文化庁参事官室）「文化財の修復事例からの油性塗料の使用実績等の概説」

柳澤宏江（博物館明治村）「明治村の建物群の修復に使用した油性塗料に関して」

大澤茂樹（大澤塗装株式会社）「日本に於ける油性塗料を含めた塗装史に関して」

フォルカ・キースリング（ドイツ技術博物館）

[History, Chemistry and Identification of Surface Coatings]

## 総合研究会（④企）

所内で開催する総合研究会は、企画情報部が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成19年度より独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知している。平成23年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。

- ・ 第1回 2011（平成23）年11月1日（火）  
勝木言一郎（文化遺産国際協力センター）「フランス国立図書館蔵敦煌文書《修佛龕記》に関する考察」
- ・ 第2回 2011（平成23）年12月6日（火）  
木川りか（保存修復科学センター）、小峰幸夫（客員研究員）、林美木子（研究補佐員）  
「日光の歴史的建造物における広域虫害調査について」
- ・ 第3回 2012（平成24）年1月10日（火）  
今石みぎわ（無形文化遺産部）「民俗技術と自然環境—削りかけ状祭具と樹木との関わりを中心に」
- ・ 第4回 2012（平成24）年2月7日（火）  
早川典子（保存修復科学センター）「絵画修復における汚れ除去の模索」
- ・ 第5回 2012（平成24）年3月6日（火）  
小林達朗（企画情報部）「国宝本・虚空蔵菩薩像の表現—仏画の高精細画像形成—」

## 企画情報部研究会（④企）

企画情報部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成23年度は下記のような研究会が行われた。

- 5月11日（水）土屋貴裕（東京国立博物館）「メトロポリタン美術館所蔵『聖徳太子絵伝』について」
- 5月25日（水）マシュー・マッケルウェイ（コロンビア大学）「最大の洛中洛外図—制作環境と年代仮説」
- 6月29日（水）留啓群（台湾師範大学・来訪研究員）  
「日本統治時期における台湾伝統書画のアイデンティティへの模索」  
南明日香（相模女子大学）「ジョルジュ・ド・トレッサン（1877-1914）の室町期絵画評価」
- 7月27日（水）相澤正彦（成城大学・客員研究員）「『浄瑠璃本『かるかや』の画風」
- 8月30日（火）フランク・フェルテンズ（コロンビア大学・来訪研究員）「琳派と能の関係についての再考」
- 9月20日（火）河合大介（研究補佐員）「ミニマル以後のアート—内藤礼の近作をめぐって」
- 10月18日（火）塩谷純「大村西崖と朦朧体」  
大西純子（東京藝術大学）「大村西崖撰『支那美術史雕塑篇』について（資料紹介）」
- 12月20日（火）科研中間報告会「諸先学の作品調書・画像資料類の保存と活用のための研究・開発  
—美術史家の眼を引継ぐ」



- 1月24日（火）森下正昭（客員研究員）「東日本大震災被災地における文化財救済活動調査  
—オーストラリア学会における発表報告とインタープリテーションの重要性」
- 2月28日（火）綿田稔「『御絵鑑』について」  
津田徹英「佛光寺本『親鸞伝絵』をめぐる」
- 3月5日（月）メラニー・トレーデ（ハイデルベルク大学）  
「『文化的記憶』としての八幡縁起の絵画化—その古為今用」
- 3月27日（火）岡田健（保存修復科学センター）、芹生春菜（東京芸術大学大学美術館）  
「敦煌壁画の制作材料と制作技法に関する研究—莫高窟第285窟壁画の復元的考察—」

## 保存修復科学センター研究会（④保）

- (1) 「被災文化財救済の初期対応—生物劣化を極力抑え、かつ後の修復に備えるために」  
日 程：2011（平成23）年5月10日（火）13：30～17：00  
会 場：東京文化財研究所地下会議室、参加者：161名  
講演者：坂本勇（フリーランス・ペーパーコンサバター）  
「インドネシア・アチェおよび東北の大津波で被災した文化遺産の救出活動について」  
江前敏晴・東嶋健太（東京大学大学院農学生命科学研究科）  
「紙文書類のカビ抑制に与える塩水の効果について」  
谷村博美（紙修復家）  
「プラハ洪水の際、被災文化財レスキューに使われたスクウェルチ・パッキング法」  
木川りか他（東京文化財研究所）「座布団圧縮袋を用いたスクウェルチ・パッキング法の検討  
—真水、塩水に浸した紙資料、日本画、油絵の状況について（デモンストレーション）」  
情報交換・意見交換（具体的方法についての討論）  
コメンテーター（順不同）：高妻洋成（奈良文化財研究所）、青木睦（国文学研究資料館）、日高真吾（国立民族学博物館）、岡泰央（国宝修理装演師連盟）、木島隆康（東京芸術大学）、今津節生（九州国立博物館）、山下好彦（東京文化財研究所客員研究員）、山口孝子（東京都写真美術館）他
- (2) 「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」  
日 程：2012（平成24）年2月17日（金）13：30～17：15  
会 場：東京文化財研究所セミナー室、参加者：66名  
講演者：佐野千絵（東京文化財研究所）「美術館・博物館 2011年夏の節電対策のアンケート結果」  
福永治（国立新美術館）  
「美術館における温湿度設定の考え方—全国美術館会議における取り組みも含めて—」  
長屋光枝（国立新美術館）「国立新美術館における取り組み」  
石崎武志（東京文化財研究所）  
「文化財保存のための温湿度設定に対する海外の現在の動きと方向性について」  
松尾隆士（清水建設株式会社技術研究所）「オフィスビルにおける最新省エネ技術」  
意見交換